

早稲田大学歴史館開館記念企画展

「東京専門学校に集った学生たち——在野精神の源流」

廣 木 尚

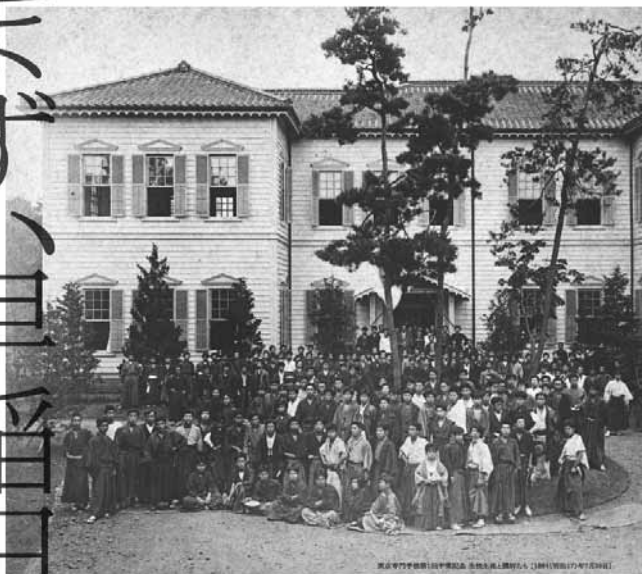
二〇一八年度の春季は、昨年三月に開館した早稲田大学歴史館の開館記念として、本学創立当初の学生たちにスポットをあてた企画展「東京専門学校に集った学生たち——在野精神の源流」を開催した。

会期は二〇一八年三月二〇日から四月二二日までの一か月間、会場は早稲田大学歴史館企画展示ルーム（早稲田キャンパス）であった。期間全体で四、九八〇人という多くの来館者があった。

本展示会開催に当たり、ご協力をいただいた国立国会図書館憲政資料室、長岡市立中央図書館文書資料室、廣井重和氏、横山真一氏ほか、関係機関・各位に、あらためて御礼を申し上げる。

以下、主な展示資料を紹介しつつ、企画展の内容を説明したい。なお、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学学術資料センター所蔵の資料である。

まず、早稲田を知る。



東京専門学校創立100周年記念 史料展「開校から」(開校100周年1977年)

早稲田大学歴史館開館記念企画展

東京専門学校に集った学生たち
—在野精神の源流—

会期 2018年3月20日(火) > 4月22日(日)

開館時間 10:00 - 17:00 [休館日] 3月21日(水)

会場 早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

入場無料

主催 早稲田大学大学史資料センター

[お問い合わせ先]
早稲田大学大学史資料センター
Tel. 042-451-1343 www.waseda.jp/culture/archives/



早稲田は こうして、 早稲田になった。

早稲田大学歴史館開館記念企画展

東京専門学校に集った学生たち —在野精神の源流—

新進の知識人・小野梓と、彼を慕う若者たちが立ち上げた東京専門学校。明治十四年の政変で政府を追われた大隈重信の庇護のもと、「薩反人の学校」ともみなされたこの学校を、あえて選んだ学生たちがいた。寄宿舎あがての乱舞気騒ぎに喧嘩沙汰、官軍をもものともしい政治活動……。教室で最新の自由思想を身につけて、学生たちも「独立」を目指した。権力を恐れず、権威におもねらず。在野の志を胸に、若者たちが繰り広げた都の西北のはじまりの物語。



最初の校舎（アール・スクエアの一角）



第1回卒業生（前列）（1889年10月7日撮影）
早稲田大学歴史館開館記念企画展



創立期日記
（1886年10月～1889年10月21日）

山田英太郎日記（一）
元早稲田大学歴史館開館記念企画展

1 創立期の状況

1882年10月21日、80人の学生とともに、東京専門学校は産声をあげた。「学園の独立」を掲げたこの学校に、学生たちは何を求め、集ったのか。

2 初期の講義

欧米の最新の知識を日本語で教授するのが東京専門学校の教育の特徴だった。教室で講義たちは何を伝え、学生たちは何を学んだのか。

3 学生の生活

学生の自主性を最大限尊重した東京専門学校。学問に、運動に、ときには非法活の政治活動に精力をそそぎ、学生たちが目指した「独立」とは、



会場 早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

交通案内

- 東京メトロ東西線「早稲田」駅 徒歩7分
- 都電荒川線「早稲田」駅 徒歩5分
- JR山手線・有楽町線「高田馬場」駅（早稲田口）から徒歩16分「早大正門」/有楽町線「早稲田」駅 徒歩20分

主催 早稲田大学大学史資料センター

【お問い合わせ先】

早稲田大学大学史資料センター

Tel. 042-451-1343 www.waseda.jp/culture/archives/



はじめに

早稲田大学には、現在、約五万人の多種多様な学生（大学院生を含む）が在籍している。しかし、一八八二（明治一五年）一〇月、早稲田大学の前身、東京専門学校が開校した時、入学登録者の数はわずか八〇人に過ぎなかった。当時の教育事情において、これを多いとみるか少ないとみるかは一概にいえませんが、今日の早稲田大学が、創立当初とは比較にならないほどの規模と、多様な内実を備えるに至っていることは間違いない。

しかし、規模や形は変わっても、変わらず受け継がれているものがある。「学問の独立」という理念、「在野の精神」を尊ぶ気風、これらは創立以来、早稲田大学が培ってきた校風——早稲田が早稲田であるゆえん——として、学外にまで広く知れわたっている。

「学問の独立」は、創立の日、小野梓によつて唱えられた。建学理念のおおもとは、小野をはじめとする建学の担い手たちの思想にある。

しかし、理念はそのままでは校風にはならない。それに感化され、共鳴し、行動する学生の存在があつて、はじめ建学の理念は早稲田大学の「校風」として、目に見えるかたちをもつたのである（真辺将之『東京専門学校の研究』一二〇頁）。学生をみずして大学の歴史を語ることはできない。

早稲田大学歴史館の開館にあたり、本展示会では、創立期の学生たちに注目し、その思想と活動に迫ることとした。明治十四年の政変の翌年、政府を追われた大隈重信の庇護のもとで産声をあげた東京専門学校は、当初、「謀反人の学校」「立憲改進黨の黨員養成所」として政府から警戒され、さまざまな苦難に遭遇した。その学校をあえて選び、

門を叩いた学生たち——彼らは、早稲田で何を学び、何をなし、何者になっていったのか。ときには提唱者の意図をも超えて、おのがじし「独立」を目指した若者たちの軌跡に触れることが、「早稲田らしさ」への理解を新たにする機会ともなれば幸いである。

【主な展示資料】

最初の校舎（グリーンハウス）の一部

フライヤー表面（二頁）の写真にある校舎は、エントランスの屋根や窓枠をエメラルドグリーンに塗装したことからグリーンハウスと呼ばれた。展示の部材はエントランス屋根中央の突起部にあたる。グリーンハウスは昭和初期に東伏見運動場に移築され、運動部の合宿所として使用されたが、老朽化のため一九八八年に解体された。その後、一九九二年、追分校地に復元新築された。

【写真】東京専門学校第一回卒業記念 全校生徒と講師たち

第一回卒業式当日、グリーンハウスの前で撮られたもの。校舎入口付近に大隈重信・小野梓・高田早苗の姿がみえる。片側の肩を突き出した壮士風の立ち方など、当時の学生の気風を垣間見ることができるといえる。

1. 若者たちは早稲田をめざす―東京専門学校理念と教育

一八八一（明治一四）年一〇月、いわゆる明治十四年の政変で、大隈重信と、その系列にあった官僚たちは政府を

追われた。イギリス型の立憲主義国家を早急に打ち立てようとする大隈派の政治構想が、他の政府高官から危険視されたことがその背景にあった。以後、政府の方針は強力な君主権を保持するドイツ型国家の構築へと傾いて行き、大隈らは野に在って政党政治の道筋を模索することになる。

翌一八八二年、大隈らは自らの理念を実現するための二つの組織を設立する。立憲改進黨と東京専門学校である。この内、東京専門学校の創立を担ったのは、大隈の右腕として行動をとらした新進の知識人・小野梓と、高田早苗・天野為之ら小野を慕い集った東京大学出身の若者たちだった。

「学問の独立」の理念のもと、東京専門学校では日本語による速成教育（当時の高等教育は、一般に外国語で行われていた）と、政治党派に偏らない科学としての専門学に基づいた教育が目指された。学生のうち、ある者は欧米の最新の知識を日本語で学べることに、ある者は双生児ともみなした立憲改進黨の主張に、ある者は政治に従属しない自治・独立の気風に魅せられて、東京専門学校の門をくぐったのである。

大隈重信と小野梓

明治維新後、大隈重信（一八三八―一九二二）は参議・大藏卿などの地位にあつて、欧米流の近代化政策を強力に推進していた。

政策実現のため、大隈は欧米の思想・文物に精通した人材を積極的に登用した。そこに現れたのが、留学帰りの俊英・小野梓（一八五二―一八八六）であった。

米・英で吸収した近代的な立憲主義を、日本で実現する宿願をもちながら、藩閥の壁に阻まれていた小野は、大隈のブレーンとなる道に自らの理想を賭けた。明治十四年の政変後、大隈と行動をとらした小野は、立憲改

進党と東京専門学校の設立準備に邁進する。政府の方針とは異なるもう一つの近代を目指して、東京専門学校は船出した。

【主な展示資料】

【写真】東京大学卒業記念写真（一八八二（明治一五）年七月）

一八八二（明治一五）年の東京大学の卒業写真。山田一郎、高田早苗、山田喜之助、岡山兼吉の姿が写る。小野梓のもと鷗渡会を結成した彼らは、三か月後には東京専門学校の教壇に立つことになる。

前島密写「大隈参議国会開設建議」／早稲田大学図書館所蔵

明治政府の参議たちは、各々憲法意見書を上呈することになったため、大隈も一八八一（明治一四）年三月、自身の意見書を提出した。これはその写しである。ここで大隈はイギリスを模範とする政党内閣制の導入、翌年の憲法制定と二年後の国会開設などを主張した。当時の政府部内にあつて急進的な大隈の政治構想が、明治十四年の政変で大隈が政府を追われる遠因となった。

井上毅「憲法中綱領之議」（一八八一（明治一四）年）／国立国会図書館憲政資料室所蔵

右大臣・岩倉具視の憲法意見書を簡条書きで記したもの。太政官大書記官・井上毅の起草とされる。欽定憲法、議會と距離を置いた内閣制度など、ドイツをモデルとする君主権の強い憲法を目指しており、その後の憲法起草の既定路線となった。明治十四年の政変の結果、政府内部ではドイツ型の国家構想が支配的となり、それまで英米流の学問

を教授していた東京大学（一八八六年より帝国大学）でも、ドイツ学が主流となっていた。

小野梓「祝東京専門学校之開校」（一八八二〔明治一五〕年）／早稲田大学図書館所蔵

一八八二（明治一五）年一〇月二二日の開校式での小野の祝辞。ここで小野が宣言した「学問の独立」には、外国の学問からの日本の学問の独立、政治からの学校の独立という二つの意味が含まれ、独立・自治の気風を持つ国民の育成を目指した東京専門学校の根本理念となった。

最初のカリキュラム（一八八二〔明治一五〕年）

授業は第一学期（九月～二月）、第二学期（三月～七月）の二学期制となっており、カリキュラムは第一年度には基礎的な科目を多く配し、進級するにしがたい専門的な科目が多くなるように組まれていた。なお、創設時の学科の内、理学科は教員・学生の不足から一八八五（明治一八）年に廃止されている。

【写真】天野為之の講義風景（一九〇九〔明治四二〕年頃）

【写真】シェークスピアを講ずる坪内雄蔵（逍遙）（一九〇九〔明治四二〕年頃）

廣井十三宛廣井一書簡（一八八二〔明治一五〕年二月二四日）／廣井重和氏所蔵

廣井一（一八八五年政経卒）が父親に宛てた書簡。日本語で行われる講義の利点や、新築の洋風校舎の美しさなど、

東京専門学校の魅力を記している。

山田英太郎筆記ノート 高田早苗「欧米史」第一（一八八二（明治一五）年一〇月二日～一八八三（明治一六）年一月二三日）

山田英太郎（一八八五年政経卒）が筆記した創立当初の高田早苗による講義の受講ノート。第一学期に古代史・中世史を、第二学期に近代史（特にイギリス史）を講じた。東京専門学校の教育の特色は、学問の概念を社会に基礎づけて定義し、学理と実際問題との密着を説くところにあった。そのため、社会の慣習やその変遷を学ぶ歴史教育が、政治学・経済学・法律学の前提として重視された。

山田英太郎筆記ノート 天野為之「経済原論」全

廣井一筆記ノート 天野為之「経済学」卷之一（一八八二（明治一五）年二月）／廣井重和氏所蔵

経済系の科目は、主に天野為之（一八六一～一九三八）が担当した。「経済原論」で天野は経済学を社会を単位に富の生産・分配・交易の法則を研究する学問と定義している。天野はイギリス古典派経済学の成果に依りつつ、日本ではあまり知られていなかったドイツ歴史学派の学説にも触れ、歴史的事実を重視しつつも普遍的な経済法則を探求することを目指した。この講義内容は、一八八六年、富山房から出版され、日本語による最初の体系的な経済原論としてベストセラーとなった。

廣井一筆記ノート 山田一郎「政治原論」／廣井重和氏所蔵

山田一郎は英米流の政治学説を参考に、国家も社会の一部ととらえ、「政治ハ社会ノ一業務」とみなす立場から、ドイツ国家学とは異なる独自の政治学を構想した。社会と国家をつなぐ政党の役割を重視し、イギリス流の議院内閣制の必要性を強調した山田の議論は、近代日本における政党論の先駆としても、高く評価されている。

W. Bagehot "LOMBARD STREET : a description of the money market" (一八七三年)／早稲田大学図書館所蔵

H. D. Macleod "The ELEMENTS of BANKING" (一八七六年)／早稲田大学図書館所蔵

J. W. Gilbert "THE HISTORY, PRINCIPLES, AND PRACTICE OF BANKING" (一八八二年)／早稲田大学図書館所蔵

天野為之「銀行論」で指定された参考書の一部。教場では日本語による速成教育を行う一方、原書で欧米の最新知識を深めることも推奨された。

東京専門学校の日誌(一八八三(明治一六)年九月〜一八八四(明治一七)年八月)／早稲田大学図書館所蔵

寄宿舎生の出入、教員・学生の動静、入学試験や学校行事の模様など校内の日々の出来事が記録されている。

廣井一の卒業論文(一八八五(明治一八年)／廣井重和氏所蔵

「人口ノ原理ヲ論シテ日本ノ現状ヲ序シ救治ノ方策ニ及ブ」と題する廣井一の卒業論文。「第一章 人口之原理ヲ論ズ」「第二章 反対論ヲ評論ス」「第三章 日本ノ現状ヲ序ス」「第四章 救治ノ方策」の各章からなる。一八八五(明治一八年)年の五月一五日に筆を起こした廣井は、六月二日にこの論文を書き終えている。

2. 情熱と喧騒の早稲田―学生たちの活動と生活

学生の自主性を尊重することが、東京専門学校の教育の大原則だった。「学問の独立」の担い手は不規律の中から立ち上がる――授業に出なくてもとがめない。何に精を出しても構わない。相撲や撃剣（剣術）の稽古に勤しむ学生もいれば、昼夜を問わず青白い顔で学問に打ち込む学生もいた。寄宿舎では夜ごと政治談議や喧嘩沙汰が繰り広げられ、学生に嫌われた講師は弾劾の的となることも覚悟しなければならなかった。

学問的な客観性を重視する講師たちは、学生を特定の政派に誘導しようとはしなかった。しかし、学校をつつむ自由な空気は、学生たちの政治意識を自ずから自由民権派に近づけていった。政治的中立性を意味した「学問の独立」は、妨害や弾圧に屈しない学生たちの行動をつうじて、権力におもねらない反骨の精神に発酵していった。

【主な展示資料】

【写真】東京専門学校全景（一八九〇〈明治二三〉年頃）

写真中央の建物がグリーンハウス。その右奥に寄宿舎がみえる。開校から一〇年近くたっても学校の周りにはまだ一面の田圃が広がっていた。ある学生がいさかいのあった近所の女性を出あい頭に田圃に投げ飛ばしたという物騒な話も伝わっている。

【写真】 第二回卒業生と講師たち（一八八五（明治一八）年七月二十六日）／早稲田大学演劇博物館所蔵

講師の坪内雄蔵、天野為之、高田早苗、卒業生が多羅尾浩三郎（三重）、漆畑元吉（静岡）、澤田愛作（長崎）、廣井一（新潟）、川上淳一郎（新潟）、秋広淡一郎（広島）、岸小三郎（岐阜）、稗田三平（千葉）、高山圭三（福岡）が写る。

学生の中には妻帯者や地方議会に議席を有する者までおり、大学を出たての講師たちより年長の者も多かった（カッコ内は出身地）。

【写真】 市島謙吉と撃剣部員（一八九〇年代）

【写真】 撃剣部の練習風景（一九〇九（明治四二）年頃）

廣井一「東京専門学校騒動」／廣井重和氏所蔵

開校後間もない一八八二（明治一五）年一二月頃に起った、学生同士の喧嘩沙汰を書き残したものだ。日ごろから他の学生たちを馬鹿にしていた津留光三郎（法律科二年）という学生を、「数百人」の学生が追いかけてまわした。結局、津留は大隈邸の庭に潜んでいるところを発見されてしまう。高田早苗や寄宿舎補幹の前橋孝義が間に立ち、憤る学生たちを長時間説得した結果、津留が真剣に謝罪することでようやく騒動はおさまったという。当時の学生たちの荒々しい気性を今に伝えるエピソードである。

【写真】 校内の落書に関する文部省書記官の報告書（一八八三（明治一六）年六月八日）／国立公文書館所蔵

東京専門学校を巡視した文部省書記官（辻新次・穂積陳重）は、教室の机上に不穏な落書きがあるのを目にした。

「原理難分君与臣 皇統連綿化為塵 心腸鉄石論民約 東海婁騷是此人」

学問的な原理をつきつめれば君主も臣下も違いはない。皇統の永続性など塵に等しいものだ——「東洋の婁騷（ルソー）に名を借りた激烈なアジェーションに、当時、高まりをみせていた自由民権運動の色濃い影響をうかがうことができる。この一件は文部卿に報告され、さらに参議にまで転送された。

廣井十三宛廣井一書簡（一八八三〔明治一六〕年二月二九日）／廣井重和氏所蔵

一八八三（明治一六）年二月の徴兵令改正で、それまで認められていた徴兵猶予の規定がきびしくなり、東京専門学校をはじめとする各私立学校から大量の退学者が出ることになった。廣井一は、悲觀的見通しとともに、この話題で校内が騒然となる様子を書き送っている。

探聞（東京専門学校生徒臨時退校ノ件）（一八八七〔明治一〇〕年四月四日）／国立国会図書館憲政資料室所蔵

学内に入り込んだ政府の密偵による報告書。政談演説会を傍聴するため、学生たちが形ばかりの退校届を提出し、終了後に取り下げるといふ行為を繰り返していると伝えている。当時、学生は政治活動は集会条例で禁じられていたが、学生たちはこうした方法で法の目をかいくぐっていた。

高橋文質宛増田義一書翰（一八九一〔明治二四〕年二月一日）

邦語政治科の学生・増田義一（一八九三年卒）が郷里の後援者・高橋文質に宛てた書状。学内で行われる討論会の知らせや近況を書き送っている。

明治二十三年五月中旬東京専門学校壁書写（一九一四（大正三）年転写）／早稲田大学図書館所蔵

教室や図書室などに書かれた落書きを、校友・室井平蔵が写しとったもの。時評や教員の似顔絵などから、当時の世相や学校に対する学生たちの視線をうかがうことができる。

高田早苗の遭難服

一八九二（明治三五）年の第二回総選挙は政府による激しい選挙干渉が行われたことで知られる。学校運営のかたわら衆議院議員をつとめていた高田早苗も、当選直後の五月三〇日、玄洋社の壮士四名に襲撃され、全治一か月の刀傷を負った。これはその際、高田が身に着けていたもの。高田の遭難を知った学生たちは「讐敵を討たいでどうする、学校の名折になる」といきり立ち、敵対陣営に切り込まんばかりの騒ぎとなったが、学校幹部の苦心で、なんとか事をなきをえたという（増子喜一郎〈一八九三年邦語政治科卒〉の回想）。

秘密出版事件の諷刺画（一八八七（明治二〇）年）／早稲田大学図書館所蔵

一八八七（明治二〇）年、内閣法律顧問ボアソナードや谷干城、板垣退助らが執筆した条約改正交渉や憲法制定に関する秘密書類が、民権派によって秘密裏に印刷・出版されるという事件が起きた。この秘密出版には東京専門学校（現早稲田大学）の学生・卒業生も多数関わっており、講義中の教場に警官が踏み込んで学生を拘引する騒ぎとなった。最終的に木原勇三郎・野附常雄・今井一・奥沢福太郎らが犠牲となり、監獄に入ること、他の多くの学生は放免された。

「下宿営業牛込区」〔「FOBAE」第二〇号〕と題するこの絵は、著名な諷刺画家・ビゴーによるもの。縛られた学生は「こんなこともうせんもん（専門）だ」と校名と掛け合わせた台詞を吐いている。

【写真】秋期大運動会の記念写真（一八八八（明治二二）年一〇月一〇日）

開校当初の運動会は、肉体的な運動だけではなく、政治的な示威運動という意味も持っていた。奇抜な扮装をし、政治スローガンを記した大旗小旗を掲げて、学生たちは運動会に熱中した。「阿世の徒を筆誅する筆」として五メートル以上もある筆を担いで参加した者まであったという。結局、警察の干渉により、数年後からは引率者が同伴する政治性のない催しとなっていた。

篠田克己日記（一八八六（明治一九）年～一八八八（明治二二）年）

篠田克己（一八八九年法卒）の学生時代の日記。篠田は現在の福岡県甘木市に生まれ、後に郵便局長などをつとめた人物である。東京専門学校で行われた運動会や演説会の模様、「秘密出版事件」（文中では「印刷事件」）で校内が騒然とする様子などを克明に伝えている。

3. 野に在って花開く／早稲田を巣立った学生たち

一八八四（明治一七）年、東京専門学校は第一回の卒業生を送り出した。最初、一二名だった卒業生の数は、一〇〇年後には通算して一〇〇〇名を超えるに至る。

学生時代の気風そのままに、反官僚意識が強く政治志向の旺盛な卒業生たちには、新聞・出版界や政界を志す者が多く、この分野で他校の卒業生を圧倒した。やがて一八九〇年設立の文学科からも卒業生が輩出するようになる。 「政治・ジャーナリズム・文学の早稲田」という傾向が明確となり、今日までつづく大学イメージがかたちづくられた。

早稲田を巣立った後も、卒業生たちは校友として有形無形に母校を支えた。官途に背を向け、民間にあつて地力を蓄えた校友たちは、やがて、政治家として、ジャーナリストとして、デモクラシーの強力な担い手となつていった。「在野の精神」を実践する校友の活躍が、新時代の青少年たちを惹きつけ、彼らの足をさらに早稲田の地へと向かわせていくことになる。

校友たちの肖像

山田英太郎（一八六二～一九四六）

尾張藩士の家に生まれる。知人の紹介で面会した小野梓の人格識見に心服し、一八八二（明治一五）年、東京専門学校政治経済学科に入学。卒業後、『朝野新聞』社員や愛知県会議員を経て、成田鉄道社長、岩倉鉄道学校校長、日清生命保険会長など要職を歴任した。早稲田大学でも評議員、基金管理委員、維持員をつとめている。

廣井一（一八六五～一九三四）

越後国古志郡（現・新潟県小千谷市）の生まれ。一八八二（明治一五）年に上京し、慶應義塾を経て東京専門学校政治経済学科に入学した。卒業後は郷里に戻り、教員をつとめる傍ら、改進黨系の政治家として活動。『越佐毎日新聞』の主筆や、長岡銀行・越後鉄道会社等の創設に関わるなど、一貫して地元の政治・経済・教育の発展に尽力した。

増田義一（一八六九～一九四九）

越後国頸城郡戸狩村（現・新潟県上越市）出身。郷里の『高田新聞』で改進黨系の言論活動を行い、同社の高橋文質

の後援で東京専門学校に入る。卒業後、『読売新聞』を経て実業之日本社を創立、社長をつとめた。『実業之日本』『婦人世界』等々、多くの雑誌の発行を手掛け、大日本印刷などの創立にも関わる。その一方、一九二二（明治四五）年から八期にわたり衆議院議員をつとめ、政財界で重きをなした。早稲田大学でも募金委員・維持員・理事などを歴任し、母校の発展に尽力した。

【主な展示資料】

山田一郎「在京同政会員に向けて更に望む所あり」（『中央学術雑誌』第二二号、一八八六（明治一九）年一月）

山田一郎「本年度得業の会員諸氏に告ぐ」（『中央学術雑誌』第三四、三五、三七号、一八八六（明治一九）年八月九月）

講師の山田一郎は中央集権の弊害を指摘し、卒業生たちが地方にあつて自治の担い手になることを期待した。しかし、学生の中央志向は強く、山田は「何故に官途に就くと地方に出るとの二者を憎むこと蛇蝎がちの如くなる哉」と嘆いている。山田自身は一八八五（明治一八）年に講師を辞して、以後は全国各地の新聞で言論活動を繰り広げ、「天下の記者」と呼ばれるに至った。

大隈重信宛廣井一書翰（一八九八（明治三二）年一月一日）／早稲田大学図書館所蔵

郷里で言論人として重きをなしていた廣井一は、大隈重信宛の年賀状で、国内外の危機を指摘し、再び国政の陣頭に立つよう大隈に促している。この年六月、日本史上初の政党内閣・第一次大隈内閣が成立する。



一九一五（大正四）年一〇月の秋季中央校友大会

当日の出席者には増子喜一郎や増田義一の名もみえる。

※本展示の図録は、大学史資料センターのウェブサイトにて
閲覧が可能である。ウェブサイトのURLは左の通り。

<https://www.waseda.jp/culture/archives/>